

メルロ＝ポンティとラカン

小野 康男

Maurice Merleau-Ponty and Jacques Lacan

Yasuo ONO

はじめに

メルロ＝ポンティとラカンを論じるとき誰もが言及するエピソードから始めよう。エリザベト・ルディネスコは、ラカンの伝記を書くなかで、「かれはポール・クロードルの悲劇三部作の尊属殺人の問題に部分的にあてたこの年のゼミナールで、父親の死にまったく触れなかったのに、七か月後にはメルロ＝ポンティの墓のまえで泣きだした¹⁾」と記述している。メルロ＝ポンティの墓前でラカンの涙は、ジャン・ラプランシュなど弟子の離反、メルロ＝ポンティその人との論争、国際精神分析協会との軋轢など彼を取り巻くさまざまな事情のなか、メルロ＝ポンティの死がさまざまな思いを凝縮させたのだろう。

そして1961年5月10日、メルロ＝ポンティの死の一週間後、ゼミナールの聴講生を前にして、「わたしがいえるのは、このはかない運命のために、われわれの定式と言表をより以上に近づけるための時間がたりなかったということです」と述べ、それに続けて、「かれがつねに願い、そして望んだのは——そしてわたしの意思に反して、それがいいことだといえるのは——わたしがこの教壇を占めることでした」と語る²⁾。

ラカンは、メルロ＝ポンティの死後、『レ・タン・モデルヌ』に発表した論文において、死者への追悼の意を表したあと、メルロ＝ポンティに対する批判を行なう³⁾。ラカンの批判は、主として、メルロ＝ポンティにおける知覚の優位に対するものであった。知覚に立ち返るというモチーフは、知覚された直観を放棄することで科学が成果をえた現在においては意味がないというのである⁴⁾。ラカンは、続けて「[……] 知覚的外挿法の現象学の内的なもの、古来からの経験におけるフェティッシュなものの特権性やフロイトがあばいて見せたような去勢コンプレックスを説明しえないということは明白である⁵⁾」と述べ、さらには、セザンヌのタッチの問題も含め芸術の問題圏をシニフィアン⁶⁾の議論に吸収しようとする。そもそもラカンが冒頭で『眼と精神』について「もし私がいま語るものがふさわしいと信じられるとするならば、それがどこから生まれたものなのかを語ること。それは、私の立場からではあるが、それを私が理解するためにである⁶⁾」と言明している以上、メルロ＝ポンティの現象学を自らの精神分析理論を補強するために解釈するのは当然である。

ジェイムズ・フィリップスは、「論文の最後での『眼と精神』の検討において、ラカンは（メルロ＝ポンティに反して）、画家の経験のうちに無意識とシニフィアンを探し求めており、芸術作品において昇華された欲動というフロイトの見解に再会している⁷」と述べている。ラカンはその後、メルロ＝ポンティの遺稿『見えるものと見えないもの』刊行後のゼミナールにおいても否定を繰り返す。当時、アルチュセールのグループからラカンのゼミナールに参加していたジャック＝アラン・ミレールが、「あなたが『レ・タン・モデルヌ』誌のある号でモーリス・メルロ＝ポンティについて書かれた記事の中で、『見えるものと見えないもの』が出版されたことによって変更を加えたい箇所があるかどうか」と質問したのに対し、ラカンは即座に「まったくありません」と答えたのである⁸。フィリップスは、「ラカンは、メルロ＝ポンティの精神分析への関心を評価していたにもかかわらず、メルロ＝ポンティが——『見えるものと見えないもの』の「研究ノート」においてあまり重要でない例外が見られるものの——絶望的なまでに意識の哲学のぬかるみにはまっていると見ていた⁹」とまとめている。

一方、メルロ＝ポンティは、フロイトの生物学主義や客観主義的理解に反論を加え、また、当時精神分析の狭い世界で知られるのみであったラカンの鏡像段階論を「幼児の対人関係」で紹介していた¹⁰。メルロ＝ポンティの精神分析に対する考え方を凝縮した「精神分析と現象学」は、現象学と精神分析の相補的関係を主張したのち「生物学主義や客観主義はもはや力がない¹¹」、一方、「[……] 観念論的定式化はフロイトの遺産にとってもまた危険であり、おそらくは今日この遺産を脅かしている危険のなかでももっとも重大なものであろう¹²」、「[……] フロイトの研究の客観主義的な逸脱と並んで観念論的逸脱というものがあるのだ¹³」という。直後、ラカンについて「彼は深められた現象学の途を辿りなおしているのだ¹⁴」という肯定的な発言があるものの、メルロ＝ポンティ自身ソシュールの言語学を通過していたにもかかわらず、いや通過していたがゆえになおさら、「夢や機知や失策行為の背後にちぐはぐな連想の群がり¹⁵」を批判するなかで、ラカンにおける言語学主義ともいえるものに危惧を示していたのである。

とはいえ、デュボルティユは、「メルロ＝ポンティとラカン」との副題をもつ『生活世界の設立』において、ラカンの『レ・タン・モデルヌ』論文やメルロ＝ポンティのフロイトの言語学化に対する批判によってラカンとメルロ＝ポンティの関係を否定的に捉えることに疑問を抱き¹⁶、『ゼミナール』に至っては、「ラカンの回答はむしろ否認（dénégation）の性格を帯びている¹⁷」とまで述べている。ラカンの1960年代の変化を考慮すると、現実には実現しなかった、ある意味での死後の出会いを想起する必要があるだろう。

第1章 設立＝制度化

メルロ＝ポンティは、『眼と精神』の冒頭を、「科学は物を巧みに操作するが、物に住みつくことは断念している。科学は物の内在的〔＝観念的〕モデルを作り上げ、そしてその

指数とか変数に、それらの定義から許される範囲の変換操作を加えるだけであって、現実の世界とはほんのときたまにしか顔を合わせない。科学とはこの見とれるほど活動的で、器用で、割りきった思考であり、全存在を「対象一般」として、つまりわれわれにとっては無にも等しいものでありながら、やはり同時にわれわれの人為的技巧に合わせて作られているとでもいうかのように扱おうとする態度のことである¹⁸と近代の科学に対する批判から始め、「[……] 哲学はそうした操作的思考に対して身を守り、デカルトが開きそしてただちに閉じてしまった〈心身の複合体〉の次元、実存する世界や底知れぬ存在の次元に沈潜しなければならないわけである。われわれの科学とわれわれの哲学とは、デカルト主義の忠実であると同時に不忠実な二つの帰結であり、その解体から生まれた二匹の怪物なのだ¹⁹」としている。

メルロ＝ポンティが想定している体系的で内的な整合性をもつ科学は、世界から独立し、一方、それが世界のすべてを覆うことが期待されている。構造主義の時代にソシュールの構造主義的言語学が科学を標榜しようとする人文諸学のパイロット科学となったのには理由がある²⁰。そこにおいて、物も人も「上空飛行的思考」、「対象一般の思考」としてパラメータによって測定されると仮定してはじめて、シミュレーションがわれわれの生きている世界とつながりをもつのである。しかし、その公準は、世界という参照対象をシニフィアンの構造で覆ってみたら「上手くいった²¹」ということだけである。

「住みつく (habiter)」とはいかにも現象学的な表現であるが、科学の「超越的ないし超越論的基礎づけ²²」の必要性に対する言及である。メルロ＝ポンティは続けて、「科学の^{アレグロ}軽快でその場かぎりの思考が、やがて物そのものやおのれ自身を深く究めることを覚え、ふたたび哲学に立ち返るのもほかならぬこの根源的歴史性 (cette historicité primordiale) のさなかにおいてなのだが……」, 「ところで芸術、とりわけ絵画は、[科学的思考の] あゝ活動主義 [=操作主義] がおよそ知ろうとは望まないこの〈生まな意味〉の層から、すべてを汲みとるのだ²³」とする。「身体のしかじかの出来事はわれわれにこれを〈見せ〉, しかじかの出来事はあれを〈見せる〉というふうに「自然によって設定 (institués de la nature)」されているのである。[……] その中心には或る不思議な受動性があるのだ²⁴」という言葉も合わせて考えるなら、科学と(メルロ＝ポンティの考える) 哲学の分離を、「画家はその身体を世界に貸すことによって、世界を絵に変える²⁵」, 「画家が「絵のなかで考える」²⁶」といった言明に見られるように、世界との身体的関わりを媒介にして、歴史性と設立＝設定＝制度化 (institution) の概念によって、われわれが世界と結びつけられそのうちにとどまる可能性の条件を考えようとしていたことは明白である。

デュポルティユは、メルロ＝ポンティにおける「設立 (institution)」の概念の重要性を指摘し、「[……] 生きた歴史性がある。それは、自分が捉え直している伝統と自分が創始している伝統とをただ一つの動作で結びつけるときの、制作中の画家に住まっている歴史性であり、[……] 彼を一挙に、この世で描かれたことのある一切のものに合流させる歴史性なのである²⁷」という言葉を用いている。デュポルティユはまた、「表現はその本質か

らして世界の表現である」,「逆に、世界の無言の体験もいつもすでに表現的である」と述べ、主体と世界の関わりを表現として捉えている²⁸。生の世界は、設立としての表現の継承の上に成り立つ。「[……] ここでわれわれが制度化ということで考えているのは、ある経験に、それとの連関で一連の他の諸経験が意味をもつようになり思考可能な一系列つまり一つの歴史をかたちづくることになる、そうした持続的な諸次元を与えるような出来事——ないしは、私のうちに残存物とか残滓としてではなく、ある後続への呼びかけ、ある未来の希求としての一つの意味を沈殿させるような出来事——のことである²⁹。」また、メルロ＝ポンティは、「構成することはこの意味で設立することとほぼ反対である。設立されたものはわたしなしに意味をもつ。構成されたものはわたしに対してのみ、しかもこの瞬間のわたしに対してのみ意味をもつ³⁰」と述べ、構成 (constitution) と設立 (institution) を対比している。デュポルティユは「設立の主体はしたがって自己＝構成されたものではない。この主体は受動的であると同時に能動的、設立されると同時に設立するものである。この主体はある意味を受け取り、それを再創造しなければならない。したがって、わたしにとってのみ意味をもつ超越論的な意味とは異なり、設立は第一人称に排他的な特権を置かない。設立において意味はつねにすでに間主観的である。より正確に言えば、設立において意味は非人称的である。このことから、設立の概念の哲学的争点が理解される。設立はまさしく意識による対象の構成及び対象化一般に対立するのである³¹」とその意味を明確化している。メルロ＝ポンティにとって、構成は内在の外在化である、しかし、外在の内在化を含む内在と外在の往還ではなかった。「われわれはここで、制度化という概念のうちに意識の哲学のもろもろの難点に対する治療薬をもとめよう。意識の前には、意識によって構成された対象しかない。[……] 意識と対象とのあいだの交替もなければ運動もない³²。」

メルロ＝ポンティの『眼と精神』の主題は、設立と歴史性あるいは設立としての歴史性によって、科学と哲学の分離を改善することだった。『眼と精神』は、絵画の歴史において、セザンヌからラスコーの壁画に遡り、その歴史のなかに「視覚という狂気」の一貫した変形を見ていく。この論理において、根源を定めることはできない。根源は事後的に「構成」されるかもしれない、しかし、あるのは、設立の運動だけである。「いろいろな所にある洞窟の壁に描かれた最初の粗描は、探求の限りない領野を決定していたし、世界を絵画としてあるいは粗描として描かれるべきものであるとして定立し、絵画の限りない未来を呼び求めていたのであって、その点こそが、それらのうちでわれわれの心を揺り動かしている当のものであり、その点こそが、それらをしてわれわれに語りかけさせ、またわれわれをして、それらがわれわれと協同して行なった ^{メタモルフォーゼ} 変身 を通してそれらに応えさせる、当のものなのである。二つの歴史性があるわけであって、その一つは、各時代が他の時代に対して、まるで外国人に対するように、自分の関心や視角を強制するというふうにして戦いをいどむ、誤解に満ちて皮肉なあるいは嘲弄的とさえ言える歴史性である。[……] もう一つの歴史性は、それなしでは前者も成り立たないものであるが、それは、われわれをわれわれでないものに結びつける関心であり、過去が絶えざる交換を介してわれわれのうちに見

出しわれわれにもたらず生活であり、それはとりわけ、過去が過去の企て全体を一枚一枚の画面タブローによみがえらせ、投げ返し、捉え直す一人一人の創造者のうちで送りつづけている生活なのである³³。」しかし、このメルロ＝ポンティの議論は奇妙な身体を前提とする。われわれは住まうことから始めた。デュポルティユは、「われわれの観点から見れば、住まうことの根源は、(身体の)肉が他の(世界の)肉と相互包含関係において住まうこととなる。トポロジーは、「見るものと見えるものが相互的なものとなり、もはや誰が見て誰が見られるのかが分からなくなる」根源的ナルチシズムに限定された形を与えることができるような、適切な図式にほかならない³⁴」と、問題の核心をいいあてている。相互包含の関係、根源的ナルチシズムは、単なる融合ではない。トポロジーとはメルロ＝ポンティの記述がユークリッド幾何学的な表象を拒絶することをいいあらわすものである。

第2章 メルロ＝ポンティの身体

しかし、要となる身体は、単に知覚や認識の主体としての身体ではない。メルロ＝ポンティは、「人間の身体があるといえるのは、〈見るもの〉と〈見られるもの〉・〈触わるもの〉と〈触られるもの〉・一方の眼と他方の眼・一方の手と他方の手のあいだに或る種の交差が起こり、〈感じ-感じられる〉という火花が飛び散って、そこに火がとまり、そして——どんな偶発事によっても生じえなかったこの内的関係を、身体の或る突発事が解体してしまうまで——その火が絶え間なく燃え続けるときなのである³⁵」と書く。詩的には理解できるものの、われわれの常識に沿った記述はむしろフッサールのそれであろう。フッサールは、『イデーン』第二巻において、「私は自分自身に触わるのと同じような仕方では、自分自身を、自分の身体を見ることはない。なぜなら、触られる身体としての私の身体は触られながら触るものでもあるが、しかし見られている身体と私が呼んでいるものは、見られつつ見ているものではないからである³⁶」と述べる。フッサールは、触覚には再帰性を認めているものの、視覚には認めていない。メルロ＝ポンティにとっては、触覚を視覚に延長し、その結果、触覚さえもが視覚をモデルに再考されるのである³⁷。

フッサールとメルロ＝ポンティを分かちもの、それは、精神分析の発想を受け入れるか否かである。メルロ＝ポンティは、このような身体を記述するにあたって「幼児の対人関係」に明確に見られるように、フロイトの精神分析に依拠している。「幼児の対人関係」は、メルロ＝ポンティが1949年から1952年までの3年間パリ大学文学部(ソルボンヌ)で「児童心理学および教育学」を担当していたときの講義で、この間9つの講義を行い、「幼児の対人関係」は1950-51年度に第一部と第二部が開講されている。通常参照されるのはワロンとラカンの鏡像段階に言及し、メルロ＝ポンティ自身が講義録を校訂加筆した第一部であるが、第二部に相当する部分は「精神分析資料の使い方についての注意書き」という短い文章と「フロイトによる幼児の対人関係」、「フロイトの後継者たちの貢献」、「両親との関係の重要性」の三章からなる³⁸。第二部の構成を見ても明らかなように「幼児の対人関係」

で注目されるのは、精神分析に対する関心である。

ディロンは、『メルロ＝ポンティの存在論』において、メルロ＝ポンティにとって問題であったのは、「幼児がいかにして他者を他の意識として認識しはじめるか」ということではなく、むしろ、「幼児が自他の区別を欠いた経験の領域においていかにして自己と他者を別々の存在として区別することを学ぶのか」であったと指摘している³⁹。前章の言葉でいえば、構成されたわたしがいかにして構成された他者を認識するかということではなく、わたしと他者がいかにして差別的に設立されうるのかということになる。「幼児の対人関係」第一部で取り上げられている癒合 (syncrétisme)、転嫁 (transitivisme)、鏡像 (image spéculaire) といった現象はメルロ＝ポンティのその後の可逆性の概念と結び付いていくが、第二部ではその精神分析的な概念化が試みられているといえる⁴⁰。

メルロ＝ポンティと精神分析理論の関係を研究するジェイムズ・フィリップスは、第二部について、「フロイトによる幼児の対人関係」ではフロイト『性理論三篇』への関心、「フロイトの後継者たちの貢献」ではメラニー・クラインへの関心を重視している。メルロ＝ポンティは、繰り返し、フロイトが口唇性愛や肛門性愛について「性的」、「前性器的」という言葉を用いる理由を問い、「フロイトは次のような意味でいう。性的差異に関わる行動がある、性的差異を持つ限りでの父親と母親に関わる行動がある、とはいえ、父親と母親がどのように性的な差異を持つのかについて、そして性器的なメカニズムについて知識があるわけではない。性器的機構が全面的に働き出す以前に両性を予期し区別するという意味で性があるのであり、成熟以前の性という意味で性があるのである⁴¹」と結論している。メルロ＝ポンティは、ここでリビドーのリアリズム的解釈や生物学的本能的解釈によってフロイトの性を理解することを批判しているのであるが、われわれとしては、幼児の性（前性器的）と大人の性（性器的）の区別とともに、幼児の性にはすでに大人の性の予期、先取りが浸透しているという観点をフロイトから引き出していることを強調しておこう。メルロ＝ポンティは、フロイトの言葉を用いて、「初期のリビドーは未規定のものであらねばならない。幼児は多形性倒錯者 (pervers polymorphe) である⁴²」と述べている。

メルロ＝ポンティは次いでメラニー・クラインに関するさまざまな理論家の議論を取り上げ、その抜き書きを作成した上で、「これらの抜粋は、[メラニー・クラインにおいて]フロイトの概念が極度に単純化されていることを明らかにしている。知覚された対象もすべて「内的対象」と受け止められている。幻想と現実の区別も明確でなくなっている。(吸う、飲むという) 身体的活動と[心的] 取り込みの間にもはや明確な境界は設けられていない。超自我は一人の人物への同一化であることを止め、外界とのあらゆる関係のなか拡散した状態で出会われるものとなっている⁴³」と批判している。

しかし、メルロ＝ポンティは、コレージュ・ド・フランスにおける 1959-1960 年にかけての講義において、「フロイト主義の理論的諸概念は、われわれがそれを、メラニー・クラインの著作が示唆しているように、それ自体外部における内部の探究、内部における外部の探究となった身体性、つまり包括的かつ普遍的な併合の能力になった身体性から出発し

て考えてみるなら、修正もされ強化もされることになるう⁴⁴」と述べ、メラニー・クラインの思考を全般化させるとともに、癒合、転嫁、鏡像といった融合的二項関係からの脱出を人物像の取り込みに依拠するのではなく、身体そのものの差異生成的働きから捉えようとしている。

ジェイムズ・フィリップスは、このようなメルロ＝ポンティの歩みについて、概括的に次のように述べている。「メルロ＝ポンティの省察において精神分析的な思考がますます大きな役割を果たしていったことは、ソルボンヌ講義とコレージュ・ド・フランス講義の双方において辿ることができる。ソルボンヌ講義における幼児の転嫁、次々と何かに同一化することによる自己同一性の形成、そして、投影と取り込みの機制が心的／身体的性質を有することに関するメラニー・クラインの分析、これらすべてが、肉の可逆性という後期の概念を指し示している。クラインはコレージュ・ド・フランスの講義において再度取り上げられている。そして、以前、幼児について語られていたことがいまや世界の述語となっているのだ⁴⁵。」「『見えるものと見えないもの』に収録された「研究ノート」においては、精神分析的思考の役割はさらに大きくなっているように思える。精神分析的な用語が哲学的な記述に完全に浸透しているのである。「多形性 (polymorphism)」と「錯綜 (promiscuity)」がたびたび言及される。しかし、ソルボンヌ講義において幼児の性の属性とされていたのとは異なり、むしろ、存在ないし肉の属性とされるのである⁴⁶。」

こうした理解のなかで「〈自然〉の精神分析をおこなうこと：〈自然〉こそ肉であり母なのである。／肉の哲学は、それがなくては精神分析が人間学にとどまってしまうことになるような条件なのである⁴⁷」、「それゆえ、フロイトの哲学は身体の哲学ではなく、肉の哲学である⁴⁸」といった一連の発言に驚きはない。メルロ＝ポンティは、精神分析的概念を、幼児の記述から、世界の記述に、そして肉としての世界の記述に拡大しているのである⁴⁹。

以上述べてきたことに関して、二点、確認しておきたい。まず一点目は、メルロ＝ポンティの肉の概念は精神分析的な身体論に立脚していることである⁵⁰。つまり、メルロ＝ポンティにおける身体は生物学的な身体ではなく人間的な第二の身体、すなわちエロスのな身体なのである。次に二点目として、メルロ＝ポンティにおいて二項関係ないし融合が重視されているのではなく、二項性のなかでの差異化の運動が重視されていることである。フロイトやラカンにおいてファルスや父によって形象化される三項性が忌避されているのではなく、むしろ、第三項を固定することが忌避されているのである。「根源的歴史性」は根源的、原初的な構造的なものであるのではなく、設立の運動のなかで、一貫した変形としての歴史性を産出し続けることをいうのである。

第3章 ラカンの解釈

メルロ＝ポンティとラカンの間の係争は、融合か分離かの二項対立として捉えられてきた。だが、視覚＝触覚というメルロ＝ポンティの議論は単なる融合ではない。しかし、ラ

カンとの係争点はここにあるのだから、ラカンがメルロ＝ポンティを受け入れることを何が阻んでいたのかをシェファードソンの解釈に従って見ておこう。シェファードソンは、メルロ＝ポンティに対するラカンのアプローチを、メルロ＝ポンティの哲学的深化の確認、晩年の著作における新たな始まりの指摘、そしてメルロ＝ポンティとの決別という三つの段階ないし契機で構成されているものとして読み解いている。シェファードソンの解釈は、関連する概念をある程度正確に理解し、その上でラカンとメルロ＝ポンティの論述を比較し、議論の流れをつかむことを可能にしてくれるが、あらかじめの結論を前提にしているように思える。逆に、その点で、模範的な読解であるともいえる。

ラカンは、論点の要約を行った上で、「モーリス・メルロ＝ポンティは現象学そのものの限界を押し広げることによって次の一步を進めました。彼がみなさんを導くその道はたんに視覚の現象学の次元のものではないことがお解りになるでしょう。というのもこれこそ重要な点ですが、この道は、見えるものは見る者の目のもとに我われを置く何かに依存している、ということを見出すことになる道だからです⁵¹」とする。実際、「眼と精神」と『見えるものと見えないもの』を単なる詩的言語ではなく、厳密に読みうるものとするか否かは、「ものからやってくる⁵²」とされる言明を、単なる比喩以上のものとして、あるいは比喩を支える何かを想定して、支持できるか否かにかかっている。メルロ＝ポンティがいうように、まさに「火花」が飛ばねばならない。

ラカンは、この議論から自分の分け前として、「彼の指し示す道を通してしっかりと捕らえなくてはならないのは、眼差しはあらかじめすでに存在しているということです⁵³」として眼差しの先在性を取り出す。これがラカンによれば、メルロ＝ポンティの新たな一步となるものである。だが、この点までは、フロイトの概念の全般化を行ったメルロ＝ポンティにとって、問題とされることはないだろう。また、対象 a の概念を、アブラハムの部分対象、クラインの内的対象、ウィニコットの移行対象のなかで考察してきたラカンにとっても異論はないだろう。シェファードソンは「眼差しは経験的事象に属するのではなく、不可視の次元を指し示す。それは、超越の圏域ではなく、人間という動物にとって比類なき経験の領野であり、人間の受肉 (embodiment) の特殊な性格を捕らえる経験の領野なのである。それは、「主体」と「対象」、感覚による知覚と外界の実定性といった観点では把握不可能な何かなのである⁵⁴」とまとめている。

重要なのは、ここから先である。「我われが通過しに行かなくてはならないのは、見えるものと見えないものの間ではありません。我われが問題とする分裂は、現象学的経験の指向性によって導かれる世界が課すさまざまな形^{フォルム}に由来する距離のことではありません。[……] 眼差しは奇妙な偶然という形でしか、つまり我われの経験の支えとして地平において見出されるものの象徴という形でしか、すなわち去勢不安という構成的欠如としてしか、我われへと現れてはきません⁵⁵。」シェファードソンは、「すべてを視ている者」という哲学的・宗教的ファンタズムによる解釈を斥け、精神分析の開く道にメルロ＝ポンティが進みつつあったと解釈する⁵⁶。シェファードソンの解釈は、メルロ＝ポンティにおける眼差

しが世界全体からやってくるものであるのに対して、ラカンが眼差しを視の欲動の対象として捉えたとするものである。だが、われわれとしては、これが対立点となったとは考えにくい。

問題はむしろ「私がモーリス・メルロ＝ポンティにしたがって述べたこの眼差しのもとにあるということには満足があるのではないのでしょうか⁵⁷」というラカンの言明である。シェファードソンは、「ラカンにとって、主体がそのなかに消滅する快（ラカンが享樂と呼ぶもの）と主体がそのなかで生を見出す欲望の次元を対比的に区別することが問題であった⁵⁸」としている。眼差しの制御しがたい性格について一致しながらも、ラカンはメルロ＝ポンティの方向は、人間の社会的存在に逆行するものではないかと問うのである。われわれは、二項性と三項性の図式提示に終わったシェファードソンの結論についてはさしあたり留保し、メルロ＝ポンティ晩年の眼差しについて、それを「人間という動物⁵⁹」特有のものとして尊重し、ラカンが対象 a の概念に結びつけていることを指摘し、それにとどめておく。

対象 a について、実に端的な規定を与えたのは、『純粹欲望』の著者ベルナール・バースである。バースは、ラカンの論文「カントとサド」を用いて、カントの「図式 (shème)」とラカンの対象 a の理論上の位置規定の相同性を論じた『純粹欲望』を要約して「こうして対象 a と図式を比較することで対象 a の位置規定をなすものが理解される。対象 a は、経験的な対象 (épithumène) ではない。それはまた「もの (純粹な欠如)」(la Chose (le pur manque)) でもない。それは欠如しつつある純粹な対象ないし対象化された純粹な欠如 (l'objet pur manquant ou le pur manque objectif) である。とはいえ、経験的な対象という意味で対象化とはいわないという条件つきであるが⁶⁰」と書いている。対象 a については、幻覺的に作り出された原初の一体感と見出された欠如の体験、そして、一体感に取って代わるとともに一体感の不可能性を刻みつけ、欠如を充足させる欲望を開始するある種の対象という精神分析の発見から出発して、さまざまな定式化が可能である⁶¹。そこから接触ないし融合を重視する立場と分離を絶対視する立場が生じてくる。

バースはメルロ＝ポンティにおける接触の重視、ラカンにおける分離の重視を指摘したあと、「しかし、この分離を、ラカンはまさにメルロ＝ポンティ固有の、分裂 (fission)、裂開 (dehiscence)、開口 (beance)、端緒 (entame) といったトポロジ的な隱喩から出発して考察している⁶²。というのも、分離の点あるいは分離の場は、キアスムの二つのセグメントが交差する点でもあるからである。それは、反転と可逆性の場である。主体の裏地がそれとして提示されることなくしづけられる場、主体が自らを支えるあの純粹な不在の場なのだ⁶³」と書いている。対象 a は、まさに蝶番であるがゆえに、接触ないし融合に向けての後進的側面と分離に向けての前進的側面の両面から考察することが可能であり、さらに重要なことは、接触ないし融合における分離、分離における接触ないし融合の賭金となるのである⁶⁴。

思考の対象となる事態は変わらない。しかし、その方向性の相違によって、たとえば絵

画論のアプローチは異なってくる。ラカンは、眼騙しに関する古代ギリシアのゼウクシスとパラシオスの有名な絵画競争を引き合いに出し、媒介の場であると同時に危機に対する遮蔽物ともなる「スクリーン (écran)」の機能を強調する。ゼウクシスはブドウの絵を描き鳥を欺いたのであるが、パラシオスはカーテンを描き、ゼウクシスに「さあカーテンを引いて絵を見せよ」といわせしめ、画家その人を欺いたのである⁶⁵。絵画は、「眼騙し」となることによって、自己破壊へと至りかねない視の欲動を馴致する。バースは、このスクリーンについて、「防御を行なうと同時に防御されるべきものがあることを指し示す一種の防壁」として、「 $\$$ と a との間で、両者が直接現前することはないだろう。欲望の主体は欠如する対象に自らをさらしはしない。もし、さらすなら、その主体は世界の外に、「もの」という無に自らをさらすことになるだろう」と述べている⁶⁶。シェファードソンと同じく、「欲望は享樂のなかで限界を越えることに対する防衛なのである⁶⁷。」バースは、世界を越え出ることを阻止する掟、欲動を欲望にとどめおく掟を、世界の「生地」とする。これは、メルロ＝ポンティのうちに三項化の営みを見てきたわれわれにとっても、理解可能な指摘である。しかし、バースがモーパッサンの幻想小説「オルラ⁶⁸」における主体を映し返すことなく枠組のみに化した鏡を例にあげて説明するように、無としての対象 a に、あるいは、無のフェティシズムに、無を際立たせる枠への固着に導くのではないか。生地は無あるいは枠としてあらかじめ解釈されてはいまいか。蝶番的性格を凝固させてはいまいか⁶⁹。一方、メルロ＝ポンティでは、蝶番の練り上げが空虚を受け継ぐかたちになる。むしろ、メルロ＝ポンティにならって対象性に賭ける必要があるのではないか。

しかし、ラカンにおいて、メルロ＝ポンティの議論を阻止する現実的な必要があったことも確かである。ルドルフ・ベルネは、「本性を暴かれ、とはいえ、昇華された快のために維持された騙し絵 (trompe-l'œil) としてのタブローの眼差しは、その上、ラカンにとっては、まさに治療における精神分析家の位置のモデルであった⁷⁰」と述べ、このラカンのメルロ＝ポンティ論のもとに、絵画の位置規定と分析の枠組の位置規定の問題が存在することを指摘している。ラカンは、メルロ＝ポンティではなく、むしろサルトルにならって、「タブローの外では (精神分析的治療状況の外では)、他者の眼差しは主体を無化するほかない⁷¹」というのである。しかし、無からの防衛はその裏面に無のフェティシズムを招来してしまったのではないだろうか。ラカンは、精神分析の科学性を保持しようとして、フロイトのエディプス神話、原父神話を構造論として無歴史的なものに組み替えていった。逆に、フロイトは、『モーセと一神教』に典型的に見られるように、歴史を形象化することに、構造を歴史化することに向かっていたのではないだろうか。ここにも同じ蝶番から出発して二つの方向への分岐がある。

フィンクは、対象 a としての眼差しについて述べるなかで、「子どものなかに欲望を引き起こすもの、それは「他者」の欲望である。「他者」の要求ではないし、個々の事物や人物に対する「他者」の欲望でさえない。「他者」の欲望は、それが個別の事物や人物に降り立つとき、子どもの欲望を方向づけるが、欲望を引き起こしはしない。子どもから欲望を引

き出すものは、純粋な欲望性 (pure desirousness) としての「他者」の欲望である⁷²」と
 いている。二項性からの開けを負った「他者」が子どものうちに二項性からの開けを生
 み出す。精神分析的理論においては、この開けは、個々の事物や人物ではないとしても、
 三項性を代表する父親や言語に誘導されて、造形性、可塑性を失った無と化していく。メ
 ルロ＝ポンティにおける絵画は、ラスコーの継続である。それは、ラカンのように無歴史
 的な構造を語るのではない。視覚はエロスの身体に基づく狂気であり、それに形を与える
 営みによって、歴史が根源的に生成していく。

第4章 表現あるいはサントム

フィンクによれば、「ラカンは主体 (彼のいう主体とは**最も本質的なもの**を意味している)
 を無意識的欲望と同一化することから、欲動へ同一化させることに移行したといえる⁷³」と、
 1960年代にラカンに起こった変化を要約している。向井雅明は「ラカンの前期のテキスト
 が比較的性的要素が薄いという印象を与えるとすれば、それは対象 (a) が未だ理論化され
 ておらず、彼が性を想像的次元で扱う外に適切な概念手段を持っていなかったからである
⁷⁴」, 「対象 (a) については [……] 前期のラカンにおいてこれは想像的对象として見なさ
 れていたが、後期に至っては現実界を表わすものとして扱われるようになったものである
⁷⁵」と述べているが、これも同様の事情を語っている。

この変更がさまざまな混乱を引き起こしたことが、たとえば、フィンクの記述からうか
 がわれる。「「欲動を生き抜くこと」という目的に言及したからといって、ラカンは何も「完
 全に分析された」主体がノンストップで快楽を追求するマシンになる、などと言っている
 のではない。主体が満足を得ることを、欲望が制止しない、ということなのである⁷⁶。」モ
 レルもまた、「対象 a との関係による主体の標識づけののちには、原幻想 (fantasme
 fondamental) の経験が欲動になります。すると、根本的に不透明な欲動とのこの関係を経
 験した人は何になるでしょう。根元的な幻想 (fantasme radical) を通り抜けた主体は欲動
 をどのように生きるのでしょうか。分析の彼岸とはこのことであって、いまだかつて接近さ
 れたことはありません。この問題は、現在のところ、分析家自身の問題として捉えてゆく
 しか接近のしようのないものです。なぜといって精神分析家こそ、分析経験の円環の全体
 をまさしく通り抜けてきた者であることを、要求されているのですから⁷⁷」というラカンの
 謎めいた文言に注釈を加えて、欲動の「倒錯的」ないし「シニック」な解放の希望、新た
 な主体の性的自由を見るもの、逆に、享樂の決定的な断念の必要を見るもの、多くの駄文
 が費やされたと指摘している⁷⁸。フィンクのあげる例にせよ、モレルのあげる例にせよ、68
 年世代の高揚とそれに対する反動をうかがわせて微笑ましくもあるが、20世紀後半におけ
 る「設立＝制度」との関係がいまだに着地点を見出せていないことを痛感させる。

分析において、主体は「自らの選択や行動の非常に多くのものの原因との関わりで、主
 体が選択した立場や姿勢⁷⁹」である根源的幻想に出会い、その幻想の分析・構築を通して、

自らの欲望との関係を変容させていく。一方、フィンクは分析家の役割として、「対象 a の役割を演じることを通じて、分析主体が根源的幻想のなかでどのように《他者》の欲望を解釈しているのかを問題にしその解釈を変容させて、たとえばもはや満足を求めることを妨げない解釈へと変えようとするのである⁸⁰⁾」と述べている。分析家は、他者の要求や欲望に縛り付けられた主体に、他者との関係ではなく、欲動との関係で自らの生を営むことができるよう、対象 a の役割を演じつつ、他者による対象 a の拘束を解除しなければならない。分析家にとっては、対象 a は、まさに分析的な枠組への、あるいは分析的な知への純粹な欲望として、「無」とも言える「純粹欲望」である必要があるかもしれない。モレルのあげた享樂の決定的断念は、分析主体と分析家を同一視する議論である⁸¹⁾。

われわれとしては、この時期、欲望から欲動への方向転換があったことを確認し、対象 a との関係により柔軟な対応が導入される可能性が生まれたのではないかと考える。モレルは、「母親の欲望」から主体を分離する「父の名」について、「ラカンのテーゼは、「父の名」の「よい」掟があるにもかかわらず症状があるというものではなく、「父の名」そのものが数ある症状のなかで可能な症状の一つ、神経症患者親和性の症状にすぎないというものである。女性のヒステリー患者とともにフロイトによって発明された精神分析は、まず、「父の名」とともに作成された神経症的な症状の型を解明した。しかし、精神分析がそれにとどまる理由は何もない」として、精神病では、主体は母親からの分離を求めて別の症状を生み出すこと、症状は「狂気」の防衛策にさえなるということ、要するに、症状は、主体にとって苦しみであるにせよ、母親の享樂から主体が分離するための支えとなることを指摘する⁸²⁾。「父の名」もまた対象 a との関係を生きるための一つの症状にすぎないということになるだろう。デュポルティユもまた、「父の名」から「さまざまな父の名」という単数から複数への移行」によってサントムの複数性が切り開かれたとしている。「父親の機能を引き継いだのはサントムのテーマであった。とりわけ、ジョイスの場合そうであったように、主体の歴史にまさに父親が欠如するときその補填を保証する 4 番目の輪として。しかし、(そもそも例外的であった) 補填はラカンにとってあからさまに規則となった。その結果、サントムの機能は根本的には「父親の名」の機能と同一である。すなわち、根源的な人間学的掟、すなわち母親の享樂からの分離を結びつけるのである⁸³⁾。」補填もまた二つの道に分岐する蝶番であることがわかる。

ラカンは、主体の関わる世界を想像界、象徴界、現実界の複合として捉える姿勢を一貫して有していた。主体は、この三者を多少いびつではあれ、結び合わせて生を営む。ラカンの解釈では、フロイトはこの三者を結び合わせるのにエディプスの神話ないし物語を用いたが、ラカンはそれを脱神話化し「父の名」に縮減したということになるだろう。モレルは、ラカンにおける「父の名」は、理念的には、象徴界を現実界に結びつける役割を果たし、さらには、「象徴界が現実界を余すことなく覆うことを可能にする」ものであったと指摘しているが、この解釈のなかでは想像界は派生的なものとなる⁸⁴⁾。しかし、1960 年代から 1970 年代にかけてのラカンの変化のなかで、「父の名」は *père-version* と記述される

ように、倒錯 (perversion) を想起させる一つの父親ヴァージョンとなった。一方、症状 (symptôme) はその古形のサントム (sinthome) という言葉を用いて、いっそうの可塑性を獲得していく。モレルは、現実界、想像界、象徴界を結合させておく症状の機能を指し示すためにサントムという言葉を用いたと指摘している⁸⁵。「症状は欲動の満足の要請と、享楽に対する主体の防衛との間の妥協形成である」が、神経症者と精神病患者では同一の機制をもつわけではない⁸⁶。モレルは、ラカンが 1975 年に、神経症に関して、「父親は要するにサントムないし症状にすぎない」と言明したと指摘している⁸⁷。精神病のように「父の名」のシニフィアンを支えを欠くとき、主体は彼のサントムに別の支えを創出しなければならない⁸⁸」のである。

治療の終結に関する理想形が変化したといえる。分離を支えるのは無ではなく、むしろ無を内包しながら、それに形象を与えていく運動になったといえるのではないだろうか。モレルは、従来、症状と昇華が対立して考えられていたとして、「昇華の特権性は、抑圧が必要とし、そして症状を構成する妥協形成なしに欲動の満足を得ることにある。したがって、苦痛なき満足である⁸⁹」とする。一方、症状の享楽は、快と苦の過剰によって特徴づけられる。モレルは、『精神分析の倫理』のゼミナール以降、昇華に関するラカンのアプローチについて、「美のヴェールのもとで「もの」を出現させることのできる創造された対象へと欲動の「自然的」対象を変形させる」というようにまとめているが⁹⁰、昇華を症状と区別できないなど、難点を指摘している。モレルは、「ラカンは、15 年前、昇華によって芸術作品の機能を精神分析的に説明しようとしたが、もはやサントムによってそのようなことをしようとはしていない。彼の歩みは逆である。いまや芸術こそが精神分析を、症状の本性を、主体と症状との関係を明らかにするのである⁹¹。」モレルは、このとりあえずの結論に満足するわけではないが、われわれとしては、昇華はサントムとしての症状の一つであるということにとどめておこう。確かに症状の改善について、フロイトが性欲動の運命の一つとして特権視した昇華に多くを求めても意味はないだろう。

文脈は異なるが、芸術と精神分析の関係で用いられる「昇華」の概念にはさまざまな疑問がある。中井久夫は、「統合失調症についての自問自答」という架空のインタビューで、「フロム＝ライヒマンが、統合失調症の最善の改善像は芸術家だといっていますが、私はそうは思いません。そんなに社会には芸術家は要らないわけですし、さらに治ると平凡な作品になってしまうので、周囲がそれ以上治らないように配慮するわけです⁹²」と述べ、他のところでは、さらに「多くの作家、芸術家に見られるごとく、昇華はしばしば成熟を妨げさえする⁹³」とまでいっている。ルシヨン⁹⁴は、ウィニコットのトラウマ的状況を招く「見出されたもの (trouvé)」とこれを克服するための「作り出されたもの (créé)」の差異をもとに、芸術的産出について、見出されたものと作り出されたものの隔たりを埋めるにあたっての失敗を物質化するものであって、「芸術の象徴化は、しばしば主体の一次的なトラウマ領域に対して「よい」社会的な解決をもたらすものの、[……] 主観の内部という観点で見れば必ずしも組織化の絆を生み出すことに寄与しない。まさにそれゆえ、何らか

のかたちで、芸術の象徴化は強迫的に反復されねばならない⁹⁴」とし、創造の束縛的・拘束的性格、あるいは破壊への束縛的・拘束的性格を指摘している。これは、昇華という言葉を使うか否かを別にして、20世紀の芸術を支配し麻痺させた考え方に通じる。

しかし、一方で、見出されたものと作り出されたものの差異を埋めることは、常に失敗に終わることによって、二項的な関係の中に三項性の場を開いていく。重要なことは、その試みを支えるものとして、対象性の無化ではなく、対象性と対象の変形の恩恵を確認していくことであろう⁹⁵。そして、いま一つ重要なことは、メルロ＝ポンティが援用した「多形性倒錯」の身体観を分解し、多形と倒錯を分かťことであろう。十川幸司は、「多形」とは可塑性が高く、変化能力に富む状態である。一方、「倒錯」とは可塑性が乏しく、作動が固定したために病理が生じている状態である（ここで言う「倒錯」は普通使われる意味での倒錯とは関係がない）。このように「多形」と「倒錯」を分類すればセクシュアリティの病理とは「倒錯」性にこそ求められるのであって、「多形」性にはないということになる⁹⁶と指摘している。

われわれは、ここで、メルロ＝ポンティとラカンを比較できる地点にいないのだろうか。メルロ＝ポンティは、裂開を論じた。ラカンは、フロイトのエディプスの神話性を修正するなかで、「父の名」という、宗教的とまではいわなくても倫理的なものを論じた。われわれは、そこに一方における二者性ではなく三者化、一方における三者性の絶対化ではなく可塑化を見た。われわれは、ここで、メルロ＝ポンティの『眼と精神』の読みにくさをなすもう一つの極に到達する。ラスコー以降の芸術の編年体の歴史をメルロ＝ポンティに求めても仕方ない。メルロ＝ポンティは、見出されたものと作り出されたものの差異を繰り返すしかないというにすぎないだろう。しかし、それは、差異を通じて、継承される。そのなかで、個々の芸術家にとっては症状の固着にとどまるかもしれないが、人間の根本的条件が継承される希望は残る。この隘路を通過こそ、心の構造性と歴史性との出会いがあるだろう。

デュポルティユは、モレルの発言として、「サントムによって、子どもは偶然に支えられながら、母の掟から自らを分離することができる。その偶然は[……]父でもありうるが、はるかに「家族主義的」ないしエディプス的ではなく、より広い意味での社会的な生活から取ってこられた要素でもありうる」という言葉を書き留めている⁹⁷。だが、それは逆に、あらゆる形象は「家族主義的」ないしエディプス的となることも意味している。その上、そこからの開けが無のフェティシズムによってしか与えられないとすれば、この開けそのものが閉ざされてしまうこともあるだろう。逆に、いわゆる父の不在は特定の文化を指し示すものではないし、父の不在はサントムの産出の伝統であるかもしれないのである⁹⁸。

シャンブリエによれば、アンドレ・グリーンは、彼に捧げられたアヌシーでのシンポジウムで、「わたしは規範性という考え方をいっさい放棄する立場を取りたい。三項化されねばならない、パパとママがいなければならないとはいわない。わたしが関心をもつのは、創造性と破壊性との関係で、人が自分のうちにもつものをいかに用いていくかである」と

発言している⁹⁹。また、デュパルクは、グリーンの立場をまとめて、「二項関係においてさえ三項化はつねに存在する。少なくとも、子どもと母親に加えて関係そのものが存在するのだ」と述べている¹⁰⁰。グリーンという三項化は、関係の可塑的な形象化として、三項にとどまることなく四項にも、あるいは二項関係の分身化にも導く不安定なものであるかもしれない。しかし、メルロ＝ポンティとラカンの間に見出されるこの隘路こそが三項性の衰退のなかで、メルロ＝ポンティが「設立という考え方は、まさに、偶然を通した個人的歴史の基礎づけである¹⁰¹」というように、根源的歴史性として、未来へと開かれたものであるだろう。

1 エリザベト・ルディネスコ、『ジャック・ラカン伝』（藤野邦夫訳）、河出書房新社、2001年、305-306頁。ジャック・ラカンの父アルフレッド・ラカンの死は1960年10月15日、メルロ＝ポンティの死は1961年5月3日であった。

2 同書、306頁。

3 ジャック・ラカン、「モーリス・メルロ＝ポンティ」（木村雄吉・小林康夫訳）、『エピステーマー』1977年8月号、朝日出版社、59-78頁。

4 同書、60-61頁。

5 同書、65頁。

6 同書、59頁。

7 James Phillips, "Lacan and Merleau-Ponty", in *Disseminating Lacan*, edited by David Pettigrew and François Raffoul, State University of New York Press, 1996, p. 91.

8 ジャック・ラカン、『精神分析の四基本概念』（ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳）、岩波書店、2000年、157頁。

9 Phillips, *ibid.*, p. 103.

10 フロイト、ワロン、ラカンに関する鏡像論としては、Émile Jalley, *Freud, Wallon, Lacan / l'enfant au miroir*, E.P.F.L., 1998がある。

11 メルロ＝ポンティ、『言語と自然』（滝浦静雄・木田元訳）、みすず書房、1979年、188頁。

12 同所。

13 同書、189頁。

14 同所。

15 同書、186頁。

16 Guy-Félix Duportail, *Les institutions du monde de la vie*, Éditions Jérôme Millon, 2008, p. 78. メルロ＝ポンティの重要な概念である *institution* をここでは設立と訳したが、制度化と訳されることも多く、この論文では、*institution* に対して、設立、設定、制度化の意味合いを含ませていると理解されたい。

17 *Ibid.*, p. 88.

18 メルロ＝ポンティ、『メルロ＝ポンティ・コレクション 4 間接的言語と沈黙の声』（木田元編、朝比奈誼・栗津則雄・木田元・佐々木宗雄訳）、みすず書房、2002年、165頁。

19 同書、201頁。

20 言語学をパイロット科学としたラカンの科学観はフィンクによれば次のようである。古代の科学観は精神と世界の間で調和が先在するとの幻想に立脚していたが、現代の科学もそれから完全に脱却できているわけではない。ラカンは、こうした調和の先在性を、男性と女性との相補的な性的関係が存在するとの幻想に関係づけている。Bruce Fink, *Lacan to the Letter*, University of Minnesota Press, 2004, p. 141-166.

21 斎藤慶典、『フッサール 起源への哲学』、講談社選書メチエ、2002 年、238-247 頁を参照されたい。そこで斎藤は、生活世界と科学的世界について、「一方の世界で他方の世界を読み解くことができるとすれば、それはどのようにして可能になったのかが問われなければならないはずである。だが、ガリレオがそれをした形跡はない。彼は、とにもかくにも自然を数学で読み解いてみたら「上手くいった」ことに満足し、上手くいったのだからそれにますます邁進したのである。[……] フッサールはそこに、私たちの経験世界を数学的理念の世界の「近似」とみなすというもうひとつの操作が隠れていたと分析する」(242 頁)と述べている。

22 メルロ＝ポンティ、『メルロ＝ポンティ・コレクション 4 間接的言語と沈黙の声』、165 頁。

23 同書、168 頁。

24 同書、197 頁。

25 同書、170 頁。

26 同書、203 頁。

27 メルロ＝ポンティ、『世界の散文』(滝浦静雄・木田元訳)、みすず書房、1979 年、103 頁。デュポルティユの引用は 36 頁。

28 Duportail, *op.cit.*, p. 32

29 メルロ＝ポンティ、『言語と自然』、44 頁。

30 Maurice Merleau-Ponty, *L'institution / La passivité / Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Éditions Belin, 2003, p. 37.

31 Duportail, *op.cit.*, p. 138. フッサールの「幾何学の起源」は設立者の意識とその追体験の可能性という問題機制であって、フッサールの「構成」とメルロ＝ポンティの「設立」が対比されている。フッサールに関する議論は同書 21-34 頁。

32 メルロ＝ポンティ、『言語と自然』、43 頁。

33 メルロ＝ポンティ、『世界の散文』、101-102 頁。

34 Duportail, *op.cit.*, p. 118. メルロ＝ポンティの『眼と精神』に次の記述がある。「本当に、存在の ^{インスピレーション} 吸気とか ^{エクスピレーション} 呼気 というものが、つまり存在そのものにおける ^{レスピレーション} 呼吸 があるのだ。もはや何が見、何が見られているのか、何が描き、何が描かれているのかわからなくなるほど見分けにくい能動と受動とが存在のうちに ^{レスピレーション} はあるのである。」(邦訳 182 頁)メルロ＝ポンティは続けて母の胎内にあった人間の誕生を語っているが、論理的な接続は見出しがたい。性的なオルガスムスの常套句的な記述と母親の胎児ないし幼児に対する関係を、まさに幻想しているといえる。われわれのスタンスはその幻想に何をつないでいくかを問うことである。

35 メルロ＝ポンティ、『メルロ＝ポンティ・コレクション 4 間接的言語と沈黙の声』、174 頁。

36 エドムント・フッサール、『イデー II-I』(立松弘孝・別所良美訳)、みすず書房、2001 年、175 頁。また、ジャック・デリダ、『触覚、ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』(松葉祥一・榊原達哉他訳)、青土社、2006 年も参照されたい。

37 メルロ＝ポンティが、デカルトの視覚論が触覚をモデルとすると指摘するとき、触覚の理解がデカルトとメルロ＝ポンティでは異なるにもかかわらず、自らが触覚をモデルとする口実としているのではないかという疑念も浮かぶ。

38 「幼児の対人関係」第二部を含むソルボンヌにおける講義録の全体は、Maurice Merleau-Ponty, *Psychologie et pédagogie de l'enfant*, Éditions Verdier, 2001, p. 303-396. なお、講義録の出版事情に関してはメルロ＝ポンティ、『メルロ＝ポンティ・コレクション 3 幼児の対人関係』(木田元編、木田元・滝浦静雄訳)、みすず書房、2001 年の解説を参照されたい。解説では 9 つの講義として扱われているが、上掲講義録では、「人間の科学と現象学」の第一部と第二部をまとめた 8 章で構成されている。メルロ＝ポンティが校訂加筆

した邦訳所収の「幼児の対人関係」の原文は, *Maurice Merleau-Ponty, Parcours 1935-1951*, Éditions Verdier, 1997, p. 147-229 に収録されている。

³⁹ M. C. Dillon, *Merleau-Ponty's Ontology (Second Edition)*, Northwestern University Press, 1997, p. 121.

⁴⁰ Cf., James Phillips, “From the Unseen to the Invisible”, in *Merleau-Ponty, Interiority and Exteriority, Psychic Life and the World*, edited by Dorothea Olkowski and James Morley, State University of New York Press, 1999, p. 73. 『眼と精神』(滝浦静雄・木田元訳), みすず書房, 1966 年の「訳者あとがき」では, 英訳者が「幼児の対人関係」について「批判的であるよりはむしろ記述的である」として独創性を認めないのに対し, 「この講義は, 晩年のメルロ＝ポンティの問題意識を先取しているし, 彼が後に使い始める一見奇異にも見える諸概念の準備される過程を, よく示している」とあるが, まさにその通りである。

⁴¹ Maurice Merleau-Ponty, *Psychologie et pédagogie de l'enfant*, p. 332-333.

⁴² *Ibid.*, p. 333. なお, 「多形」と「性倒錯」を一体として扱うことの是非についてはのちに言及する。

⁴³ *Ibid.*, p. 368. [] は筆者による補足である。

⁴⁴ モーリス・メルロ＝ポンティ, 『言語と自然』, 1979 年, 130 頁。ここに『眼と精神』の基本的な主張を読み取ることは容易である。触るものと触られるものの関係を見るものと見えるものとの関係にまで押し広げて, 「ところで, こうした不思議な交換体系が与えられてみると, 絵画の諸問題もすべてここにあることになる。これら絵画の諸問題が身体の謎を図解してみせてくれ, また身体の謎がこれらの問題を正当化してくれるわけなのだ」といっている。メルロ＝ポンティ, 『メルロ＝ポンティ・コレクション 4 間接的言語と沈黙の声』, 174 頁。

⁴⁵ James Phillips, “Lacan and Merleau-Ponty”, p. 96.

⁴⁶ *Ibid.*

⁴⁷ メルロ＝ポンティ, 『見えるものと見えないもの』(滝浦静雄・木田元訳), みすず書房, 1989 年, 395 頁。

⁴⁸ 同書, 400 頁。

⁴⁹ これは精神分析の人間学化ともいえるが, その一方で, 精神分析の基盤を子どもと大人の差異という人間学的根本状況から捉え直そうとする試みがあることを指摘しておく。

Jean Laplanche, *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*, Presses Universitaires de France, 1987, *Sexual*, Presses Universitaires de France, 2007. 「母」については, 精神分析的思考において父親に代表される三項性の軽視は見られるが, それを母子融合の賞揚, ナルチシズムの賞揚とは捉えないでおく。メルロ＝ポンティの主張は自然, 肉, 母に対して精神分析的に対応すべきだという主張だと思えるからである。メルロ＝ポンティは生物学主義と言語学主義のどちらでもない精神分析を模索していたのだろう。

⁵⁰ ラカンによって強調された言語論ないし記号論モデルでは, 身体は必要ないかもしれない。クリストフ・ドゥジュールは, フロイトについてすでに, 「フロイトの関心は, (とりわけ『科学心理学草稿』において) 身体と精神の関係よりもむしろ, 脳と思考の関係の分析に向かっている」と指摘している。Christophe Dejours, *Travail vivant I*, PAYOT, 2009, p. 76. しかし, 自己身体の形成そのものの困難性と結びつけられる境界例ないし精神病に関して, そしてそうした傾向に関しては, 身体論, あるいは心身論が必要となる。

⁵¹ ジャック・ラカン, 『精神分析の四基本概念』, 95 頁。

⁵² 『見えるものと見えないもの』には次のような記述がある。「それでは, いったいどうして, 眼差しがそのようにしながらも, それらの物をそれぞれの場所に置きゆだね, われわれの獲得するそれらの視覚がわれわれには物からやって来るように思え, そして見られていることがそれらにとってはそれらの卓越した存在の格下げにすぎないということが起こ

るのか。」(邦訳 182 頁)「鏡像, 記憶, 類似: 基本的諸構造 (物と見られる物との類似)。けだしこれらは, 身体-世界の関係から直接派生してくる構造だからである。——反映像は映される当のものに似ている=視覚は物のうちではじまる, 或る種の物ないし幾組かの物は視覚を呼びもとめるのだ。——精神についてのわれわれの表現や概念化はすべてこれらの構造から借用されたものである (: たとえば反^{レフレクション}省 [=反映] のように) ということを示すこと。」(邦訳 402 頁)

⁵³ ジャック・ラカン前掲書, 同所。

⁵⁴ Charles Shepherdson, “A Pound of Flesh”, *Diacritics*, Winter 1997, p. 79.

⁵⁵ ジャック・ラカン前掲書, 96 頁。

⁵⁶ Shepherdson, *op.cit.*, p. 81-82. ラカンがプラトン主義的, 伝統哲学的ファンタズムに言及しているのは邦訳 99 頁及び 94-95 頁である。

⁵⁷ ジャック・ラカン, 同書, 99 頁。

⁵⁸ Shepherdson, *op.cit.*, p. 84-85.

⁵⁹ *Ibid.*, p. 79.

⁶⁰ Bernard Baas, *De la chose à l'objet*, Uitgeverij Peeters, 1998, p. 56. なお, ベルナール・バース, 『純粹欲望』(中村雄二郎監修, 中原拓也訳), 青土社, 1995 年も参照のこと。

⁶¹ 比較的近年の定式化としては以下のものを参照されたい。Bruce Fink, *The Lacanian Subject*, Princeton University Press, 1995, p. 93-94. Raul Moncayo, *Evolving Lacanian Perspectives for Clinical Psychoanalysis*, Karnac Books, 2008, p. 31. Geneviève Morel, *La loi de la mère*, Éd. ECONOMICA, 2008, p. 40-42.

⁶² メルロ＝ポンティとラカンのトポロジーの比較検討については, デュポルティユ前掲書を参照されたい。デュポルティユは, 同書 99-100 頁において, 自分の作業についてバースを引き継ぐものとして明確に位置づけている。

⁶³ Baas, *op.cit.*, p.78.

⁶⁴ アスンは, クセジュ文庫の『ラカン』において「口唇の対象は「他者」への要求の対象である。一方, 肛門的对象は「他者」からの要求の対象である。これに対応して, 視覚的对象は「他者」への欲望の対象である。一方, 音声的对象は「他者」からの欲望の対象である」とまとめているが, 後進性において, 眼差しは口唇的な食欲さと結びつく。

Paul-Laurent Assoun, *Lacan, Que sais-je?*, Presses Universitaires de France, 2003, p. 74. Cf., Paul-Laurent Assoun, *Le regard et la voix 2^e édition*, Éd. ECONOMICA, 2001, p. 83-86.

⁶⁵ プリニウス, 『プリニウスの博物誌 III』(中野定雄・中野里美・中野美代訳), 雄山閣, 1986 年, 1421 頁。バルザックの『知られざる傑作』やゾラの『制作』を通して, このスクリーンのテーマは 19 世紀の芸術制作のイメージ形成に大きな影響を与えた。不可能なものへの探求としての近代芸術概念については, Hans Belting, *The Invisible Masterpiece*, translated from German by Helen Atkins, REAKTION BOOKS, 2001 を参照されたい。なお, プリニウスでは彫刻について, 第 33 巻「金属の性質」, 第 34 巻「銅」, 第 36 巻「石の性質」と原材料によって区分され, その間に第 35 巻「〈絵画・画家〉」が位置づけられているように, 現代の「芸術」概念とはその真正さの概念において異なるものをもつ。

⁶⁶ Baas, *op.cit.*, p.81.

⁶⁷ *Ibid.* これはラカンの「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲望の弁証法」からの引用である。ジャック・ラカン, 『エクリ III』(佐々木孝次・海老原英彦・芦原眷訳), 弘文堂, 1981 年, 339 頁。なお, 訳文は変更した。

⁶⁸ モーパッサン, 『モーパッサン短編集 III』(青柳瑞穂訳), 新潮文庫, 1971 年, 167-216 頁。

⁶⁹ ジャック・ランシエールは, 『美学的無意識』(堀潤之訳, 『みすず』, 2004 年 5 月) のなかで, 死の欲動に基づく精神分析の閉塞的な傾向と美学的な言説との関係を批判している。

ワイクマンは、端的に 20 世紀の芸術文化を対象 a の時代と規定している。Gérard Wajcman, *L'objet du siècle*, Verdier, 1999. ワイクマンの議論は、映画『ショア』の監督クロード・ランズマンとの関係で、アウシュヴィッツの表象不可能性の議論によってイデオロギー的、政治的に規定されている。もっとも、スクリーン＝ディスプレイの遍在とこれを破壊して真実へと向かおうとする欲動が 20 世紀の文化を特徴づけたことは確かだろう。空虚の縁取りとしての芸術理解に関しては、Serge André, *Le symptôme et la création*, Éditions Le Bord de l'Eau, 2010 を参照されたい。

⁷⁰ Rudolf Bernet, « Voir et être vu / Le phénomène invisible du regard et la peinture », in *Revue d'esthétique* 36, 1999, p. 46.

⁷¹ Ibid.

⁷² Fink, *The Lacanian Subject*, p. 91.

⁷³ ブルース・フィンク, 『ラカン派精神分析入門』(中西之信・椿田貴史・舟木徹男・信友建志訳), 誠信書房, 2008 年, 300 頁。

⁷⁴ 向井雅明, 『ラカン対ラカン』, 金剛出版, 1988 年, 212 頁。

⁷⁵ 同書, 211 頁。

⁷⁶ フィンク前掲書, 303-304 頁。

⁷⁷ ラカン, 『精神分析の四基本概念』, 368 頁。原幻想は *fantasme originaire* の訳として用いられることが通例であり、原幻想には別の含意もあるが、われわれの文脈では、「原幻想」も「根元的な幻想」も根源的幻想の訳語で十分であると考えている。単数の「父親の名」もまた症状であり幻想であるとすれば、おそらくラカンの言葉は彼自身が意図した以上の射程をもつことになるだろう。

⁷⁸ Gneviève Morel, *La loi de la mère*, p. 40-41. ジュリア・クリステヴァの『詩的言語の革命』, ジャン＝フランソワ・リオタールの『リビドー経済』, ドゥルーズ／ガタリの『アンチ・オイディプス』などがそうした状況下で受け入れられたことは否定できない。

⁷⁹ フィンク, 前掲書, 105 頁。

⁸⁰ 同書, 303 頁。

⁸¹ ラカンのゼミナールは、精神分析家の養成を目的としたものであつて、その後のパス制度につながるラカン派独自の教育養成との関係で、同一視も仕方がないことかもしれない。

⁸² Morel, *op.cit.*, p. 20.

⁸³ Duportail, *op.cit.*, p. 188-189. ここで補填と訳した *suppléance* について、デュポルティユはジャック・デリダの差延 (*supplément*) 概念の影響を指摘している。デュポルティユの解釈を考えて、補填と訳出した。補填及びサントムについては、藤田博史, 「RSI と補填」, 『imago』1994 年 10 月臨時増刊号「総特集ラカン」, 青土社, 184-202 頁, 赤坂和哉, 『ラカン派精神分析の治療論』, 誠信書房, 2011 年を参照されたい。

⁸⁴ Morel, *op.cit.*, p. 143.

⁸⁵ Geniviève Morel, *Ambiguïtés sexuelles*, Éd. ANTHROPOS, 2000, p. 44.

⁸⁶ Ibid.

⁸⁷ Ibid., p. 45.

⁸⁸ Ibid., p. 47.

⁸⁹ Morel, *La loi de la mère*, p. 160.

⁹⁰ Ibid., p. 162.

⁹¹ Ibid., p. 163.

⁹² 中井久夫, 『精神科医がものを書くとき』, ちくま学芸文庫, 2009 年, 149 頁。

⁹³ 中井久夫, 『徴候・記憶・外傷』, みすず書房, 2004 年, 115 頁。

⁹⁴ René Roussillon, *Le transitionnel, le sexuel et la réflexivité*, DUNOD, 2008, p. 156.

⁹⁵ ゴルスはアルカイックなシニフィアンとして精神分析の理論家において、主なものをあげれば、ビオンのベータ要素とイデオグラム, ピエラ・オラニエのピクトグラム, ジャン・ラプランシュの謎めいたシニフィアン, ギイ・ロズラートの境界設定のシニフィアン, デ

イディエ・アンジューの形式のシニフィアン、ジュリア・クリステヴァのセミオティック表象というように根源的な形象化を列挙している。われわれの立場から見ると、分析を通じ、そして理論家自身の身体を通じた、対象 a の図式化、形象化であると思われる。いずれを選択するかではなく、設立としての歴史性との関連で考察すべきものである。Bernard Golse et René Roussillon, *La naissance de l'objet*, Presses Universitaires de France, 2010, p. 5-19.

⁹⁶ 十川幸司, 『来るべき精神分析のプログラム』, 講談社選書メチエ, 2008 年, 68 頁。

⁹⁷ Duportail, *op.cit.*, p. 54 en note 87.

⁹⁸ Cf., *Image du père dans la culture contemporaine : Hommages à André Green*, sous la direction de Dominique Cupa, Presses Universitaires de France, 2008.

⁹⁹ Josiane Chambrier, « Image du père dans la culture contemporaine », in *Image du père dans la culture contemporaine : Hommages à André Green*, p. 103. また, François Duparc, *André Green*, Presses Universitaires de France, 1996, p. 63-64 も参照されたい。

¹⁰⁰ Duparc, *ibid.*, p. 62.

¹⁰¹ Maurice Merleau-Ponty, *L'institution / La passivité / Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, p. 73.